偽のコインと偽の記憶―レイモンド・チャンドラー『高い窓』論

大野　真*

アメリカの作家レイモンド・チャンドラーの長編小説第３作である『高い窓』（*The High Window*）（1942 年）は、第１作『大いなる眠り』（1939 年）や第２作『さらば愛しき女よ』（1940 年）と同様に、私立探偵フィリップ・マーロウを１人称の語り手とした作品であるが、ブラシャー・ダブルーンという貴重な金貨の紛失をめぐっての謎を解き明かしつつ、事件の中心にある家族の心理を探究するなど、新しい試みが見られる。

筆者も語り手のマーロウと共に、それらの謎を追って論を進めていきたい。

１．　コインについての隠れん坊ゲーム

『高い窓』は『大いなる眠り』や『さらば愛しき女よ』と同様に、無くなったものを探すという隠れん坊ゲームで始まる。しかし、今回は、マーロウに探してほしいと頼まれたものは、行方不明の人間ではなくて、盗まれたコインである。

第２章において、エリザベス・ブライト・マードックという名前の裕福な未亡人が、マーロウに対して、貴重なコインが盗まれたことを伝える。「『盗まれたものは』と彼女は続けた。『コインなのです。ブラシャー・ダブルーンと呼ばれる珍しい金貨です。夫の収集物の中で自慢の種でしたわ』」（15）。

奇妙なことに、マードック夫人は誰がコインを盗んだのか知っていると言う。「『私は盗まれたものを取り戻したいのですが、それ以上のことを求めてもいるのです。私は誰も逮捕させたくないんです。泥棒はたまたま家族の一員だったのですー結婚によって家族になった人ですけれども。』彼女はワイングラスを肉厚の指で回して、日陰になった部屋の薄暗い明りの中でかすかにほほ笑んだ。『義理の娘なんです』と彼女は言った。『魅力的な娘で―オークの板のように強いんです』」（15）。

マードック夫人は、義理の娘、つまり、息子の嫁のリンダがコインを盗んだと主張する。「『一年ほど前に息子は、私の了承を得ずに、ばかげた結婚をしたんです。愚かなことでした。というのは、あの子には生活費を稼ぐ力がまるでなくて、私が与える以外のお金は全然ないし、それに私もお金について気前良いわけではありませんしね。彼が選んだ女性、あるいは彼を選んだ女性はナイトクラブの歌手だったんです。彼女の名前は、いかにもぴったりの名前で、リンダ・コンクエスト（Linda Conquest）と言うんです[注1]』」（15）。

マードック夫人によると、義理の娘であるリンダがコインを盗み、家を出ていって行方をくらませたのだ。「おそらく彼女はここでの生活をかなり退屈に感じていたのでしょう。おそらく息子のことも退屈だったんだわ。私だってあの子のことを退屈だと思いますし。ともあれ彼女は出て行ってしまったんです。1 週間ぐらい前に、全く突然に、行く先も伝えず、別れの言葉も残さなかったんです」（15）。

夫人の話を聞いたのち、マーロウはリンダを探し始める。盗まれたコインについての隠れん坊ゲームは、行方不明の女性についての隠れん坊ゲームを伴うのである。

マーロウが盗まれたコインを探している間に、3 人の人物が殺される。私立探偵のフィリップス、

＊薬学部第２英語研究室

コイン商のモーニングスター、色男のバニヤーの3人である。彼らは全員が盗まれたコインと関係している。『高い窓』の世界では、コインが原因で人々が行方不明になったり殺されたりする。それはコインによって支配された世界である。チャンドラーは、人々がお金によってコントロールされるような浅薄な物質主義に満ちた現代の世界を皮肉に描いているのである。

チャンドラーの文体は独特な比喩の使い方を特徴とするが、とくに『高い窓』では、金銭に執着する登場人物たちが、動物の比喩を使って描写される。

例えば、第7章でマーロウがコイン商のモーニングスターに会った時の描写で、コイン商のネクタイ及び彼自身は動物に喩えられる。「品の良い洗濯屋ならば立ち入り禁止にするような丸襟が喉仏を突き上げ、襟元には黒いひも状のネクタイが穴から出ようとしている鼠のように小さく固い結び目を突き出していた」(50、傍点筆者)。

あるいは、コインの在りかを知っているらしい様子のモーニングスターに対して、マーロウがコインが戻ったら千ドルを支払うと申し出たときの描写にも、動物の比喩が使われている。「『あなたは大変に賢い若者のようだ』とモーニングスターは言った。それから彼は顔をゆがめ、あご先が揺れ、胸が波打ち、そして、長い病の後に再び鳴き始めようとする回復期の雄鶏のように、クックッという音を発した。彼は笑っていたのだった」(53、傍点筆者)。

こうした動物に喩える比喩が効果的なのは、金銭への執着心が度を越して強く、人間性を失わせているからである。コイン商のモーニングスターは金に執着している。彼はブラシャー・ダブルーンの歴史について説明した後に、説明代として5ドルの料金を払うようにマーロウに要求する。「私があなたに話したことは、公立図書館で手に入る情報だ。フォスダイク目録に特に詳しく載っている。あなたはわざわざここに来て、私の時間を使って説明させたということだ。というわけで、料金は5ドルとなる」(52)。モーニングスターは時は金なりという原則を皮肉にも体現しているのである。

結局、モーニングスターは彼の金庫からコインを盗もうとした何者かの手によって殺される。コイン商のモーニングスターは金のために生き、ブラシャー・ダブルーンのコインにまつわる事件の中で殺されるのである。

『高い窓』において、チャンドラーは人々が金によって支配される物質主義的世界をアイロニー（皮肉）をもって描いている。ブラシャー・ダブルーンのコインは物質主義の象徴なのだ。

２．　家族内の心理―「高い窓」の謎

ブラシャー・ダブルーンのコインをめぐっての隠れん坊ごっこ以外に、『高い窓』は別の系統の謎も持っている。すなわち、マードック夫人の前夫であるホレイス・ブライトの死の謎である。

ホレイス・ブライトはマードック夫人の前夫であり、息子のレズリー・マードックの実の父親である。マーロウが第3章でレズリーに初めて会ったとき、レズリーはマーロウに対して、夫人の再婚相手である故人のジャスパー・マードックは自分の父親ではないと皮肉に語る。「ジャスパーは僕のことを好きじゃなかったし、一セントも残しちゃくれなかった。僕の父親はホレイス・ブライトという名前で、恐慌で無一文となり、事務所の窓から飛び降りた男なんだ」(30)。

この小説のタイトル『高い窓』(*The High Window*) は、ホレイス・ブライトが「窓から飛び降り

た」という事件に由来している。不況の最中の「1933 年の 4 月 26 日」(174) に起こったこの事件は、多くの人々が事業に失敗した恐慌の時期に起こった自殺事件の 1 つと見なされていた。けれども、真相としては、ホレイス・ブライトは何者かによって窓から突き落とされたのである。ホレイス・ブライトの事件はマードック家のメンバーと関連している。私立探偵であるマーロウは、飛び降り事件の鍵となる家族の心の内や記憶を探っていく。この小説は現代世界の物質主義を批判するだけではなく、家族内の心理も扱うのである[注2]。

家族内の心理を探るうえで鍵となるのが、母親であるマードック夫人、エリザベス・ブライト・マードックの性格である。最初の夫であるホレイス・ブライトの死後に、彼女はジャスパー・マードックという名前の男と再婚した。しかし今ではこの老人は死んでおり、彼女は未亡人になっている。

マーロウが初めて夫人に会ったとき、彼女は次のように言う。「『マーロウさん』と彼女は言った。『私は強い心の女ですのよ。どうかあなたを怯えさせるような真似をさせないで。あなたが私に怯えるようだったら、あまり私の役に立たないでしょうから』」(14)。

自分でこう言うように、彼女は強い心の持ち主ではあるけれども、身体的には病気である。「彼女は急に笑い出し、それからげっぷをした。ちょっとした軽いげっぷで、これ見よがしにではなく、気軽で無頓着にしたものだった。『喘息ですの』と彼女はぞんざいに言った。『このワインは薬として飲んでいるのです。ですからあなたに差し上げるわけにはいかないのですわ』」(15)。

精神的には強いが身体的には病気の母親の下で、息子のレズリーは無能な人間に育ってしまい、つまらぬ人生を送っている。また、レズリーの妻のリンダは一週間ほど前に突然家を出てしまった。すでに述べたように、マードック夫人はリンダがブラシャー・ダブルーンのコインを盗んだと主張するのだが、その一方で、リンダがここでの生活や夫である息子を退屈に思っていたであろうことを認めているし、リンダと自分との間に「あまり良い感情がなかった」(15) ことも認識している。マードック夫人は非常に強い性格で他人に影響力のある人物であるため、周囲の人間の人生を狂わせてしまうと言えるだろう。

とりわけ、マードック夫人の秘書であるマール・デイビスはこの女主人の強烈な影響下で暮らしてきた。レズリーはマーロウに対し、マードック夫人とマールとの間の関係を以下のように説明している。「ともあれ、母はマールなしにはやっていけないんだ。母にはいじめる相手が必要なんだ。マールをののしり、顔を引っ叩いたりさえするかもしれないけど、彼女なしではやっていけないんだ」(26)。

マーロウは皮肉を込めて、マードック夫人を軍馬に喩える。深く埋め込まれた「黄金製の心臓」をもつ「古強者の軍馬」である (26)。レスリーが「素朴な小娘」(26) と呼ぶところのマールは、この強い性格の老婦人の支配下にある。マールとマードック夫人の間に血のつながりはないのだが、マールにとって、年長のマードック夫人は、自分の心を強烈に支配する疑似的な母親であったと言える。愛の母親ではなくて、支配し抑圧する疑似的母親である。

第 21 章で、マーロウはマードック夫人に対して次のように嫌悪感をあらわにする。「私だって気に入らない。何もかもが気に入らない。この家もあなたもこの場所の抑圧的な雰囲気も、あの娘〔マール〕の抑え込まれてきて沈んだ顔も、あなたの下らぬ息子も、この事件も、私に知らされない真

実も、私に知らされる数々の嘘も、何もかもだ」(127、傍点筆者)。

抑圧的なマードック夫人の支配の下で、マールは病的に過敏な性格になっていった。例えば、マールは男性によって触られるのを怖れている。マーロウがマールをなだめようとして彼女の肩に腕を回したときに、彼女はパニックになってしまう。「私は何気なく、彼女の肩に腕を回した。彼女は3 フィート程も跳び上がり、眼はパニックのために輝いた。私たちはお互いを見つめたまま立ちすくんでいた。息づかいを荒くし、私の方はよくあるように口を呆然と開け、彼女の方は唇を固く締め、小さくか弱げな鼻の穴をひくひくさせていた。彼女の顔は下手な化粧をしたかのように青白かった。『さて』と私はゆっくりと言った。『君がまだ少女のときに何かが起こったんじゃないか？』彼女はすぐさまうなづいた」(128)。

マールの恐怖はホレイス・ブライトの死から生じている。「『あの人は死んだのよ』と彼女は言った。『ま、まどから落ちたのよ』」(129)。マールはそのことが忘れられず、心理的なトラウマを克服することもできないのだ[注3]。

ホレイス・ブライトの墜落事件の謎を探究していくことは、マールの心やマードック夫人との関係の謎を探究することを意味するのだ。

３．　偽のコイン

第33章と第34章で、マーロウはブラシャー・ダブルーン事件の謎を解く。それはこのコインの偽造と関連している。「この件はあまり良い話じゃない。なにしろ2つの、いや、もしかしたら3つの殺人事件が関わっているのでね。バニヤーという男とティーガーという男が或る考えを思いついた。ティーガーは老モーニングスターのいたベルフォント・ビルの歯科技工士だ。その考えというのは、希少で価値のある金貨を偽造することだった。売りに出せないほど希少ではないが、高額になるだけの希少さをもつ金貨の偽造だ。彼らの思いついた方法は、歯科技工士が金の詰め物を作る際に用いるやり方を利用することだった」(181)。

さらに、マーロウはレズリーがブラシャー・ダブルーンを盗んでバニヤーに与えたと指摘する。その盗品を原型にしてバニヤーとティーガーが偽物を作り、バニヤーが偽物の一つを私立探偵のフィリップスを介してコイン商のモーニングスターに売ろうとしたのだ。そして、後になって、仲間割れの結果、バニヤーがフィリップスとモーニングスターの両者を殺したのである。

結果的に、偽造のコインの事件に関連して2人の人間が殺されたのだ。ブラシャー・ダブルーンのコインは現代世界の物質主義を象徴している。しかし、それは偽物を作ることが可能であり、偽物のコインが人間の運命を支配するのである[注4]。

４．　偽の記憶

マーロウはバニヤーがフィリップスとモーニングスターを殺したと指摘した後、レズリーに対して、「君がバニヤーを殺したと思っている」と告げる（185)。レズリーがバニヤーを殺した理由は、後に述べるように、ホレイス・ブライトの死をめぐる謎と関連している。

それから後、第35章で、ホレイス・ブライトの飛び降り事件の謎を解くために、マーロウはマールの所に行く。マールはホレイス・ブライトを殺したのは自分であると信じ込んでいたのである。

当時、マールはホレイス・ブライトの秘書をしており、彼が彼女に言い寄ってきて、「骨の髄まで縮み上がらせた」(174) ときに、窓から突き落としたと信じていたのだ。

しかし、それは事実ではない。それは、マードック夫人によって意図的に作られた偽の記憶である。マーロウはマールに対して、彼女はホレイスを窓から突き落としてはいなかったと告げる。実は、マードック夫人こそが、保険金を受け取るためにホレイスを窓から突き落とした人物なのである。「『君は自分が彼を突き落としたと思わされていたんだ』と私は言った。『入念に仕組まれたやり口で、ある種の女が他の女性を扱う場合にしかありえない冷酷な無慈悲さで行われたんだ。マードック夫人が嫉妬をしていたなんて今では想像もつかないかもしれないが、仮にそれが動機だとしたら、まさに彼女は嫉妬していたんだ。彼女には更に強い動機もあった―5 万ドルの生命保険だ―破産した中で、これだけは残されていたんだ』」(191)。

マードック夫人は、マールの心理を操作して偽の記憶を植え付け、自分の「身代わり」(scapegoat) として無慈悲に利用したのである (191)。

それからマーロウは、証拠として、マードック夫人がホレイス・ブライトをオフィスの窓から突き落とした場面のスナップショット写真を見せる (192)。バニヤーはこの写真を用いてマードック夫人を脅迫して金を払わせようとし、逆にレズリーによって殺されたのだ。

マールの人生は偽の記憶によって支配されてきた。偽のコインが人々を支配するように、偽の記憶が彼女を支配する。『高い窓』は偽物が支配する世界を描いているのである。

5.　「治療」する者としてのマーロウ

マールは、マードック夫人によって意図的に作られた偽の殺人の記憶の強い支配下に、おびえたような人生を送ってきた。彼女は心の病に苦しんできたのだ。マーロウは最終的に、ホレイス・ブライトの死の真相を明らかにすることで、マールを偽の記憶及び疑似母（偽の母親）ともいうべきマードック夫人による支配から救う。この小説は、マールが彼女の真の両親のもとに帰ることで終わる。「マールの両親は控えめで親切で忍耐強い人たちで、静かな日陰の通りにある古い木造家屋に住んでいた」(193)。こうしてマールは実の両親と共に新しい生活を始める。

マーロウは心の病に苦しむマールを治療して正常な暮らしに引き戻したと言える。この作品において、マーロウはいわば医師の役割を演じるのだ。

しかし、マーロウは実際は医師ではなくて私立探偵である。皮肉なことに、マールを「治療」して心の病から救い出すのは、この作品においては医師ではなくて私立探偵なのだ。

『高い窓』は精神医学的な主題を扱っているのであるが、精神医学の学説を無条件に取り入れるのではなく、むしろ、当時有力だったフロイトやユングの学説に対しては皮肉な仕方での言及がなされている。例えば、或る一日で、マーロウの探偵事務所に届いた郵便物の中に、以下のようなものがある。「4 つの広告、2 通の請求書、昨年或る事件の調査で 4 日間滞在したサンタローザ（注：サンフランシスコの北にある市）のホテルからのきれいな絵葉書、ソーサリート（注：サンフランシスコの北西にある市）のピーボディーという名の男から来た、長くて読みにくいタイプライター書きの手紙。その手紙の幾分あいまいな趣旨によると、疑惑のある人物の筆跡のサンプルがあれば、ピーボディー式の徹底した検査にかけて、フロイト及びユングの両方の学説に基づいて分類された

当該人物の内面的な感情の特徴を明らかにできるとのことであった」(145)。ここでは、フロイトやユングの精神医学上の学説が通俗化されて、消費社会における広告に利用されている様子が皮肉に描かれている。

あるいは、医師が精神医学上の学説を述べるだけで患者を実際に救おうとしない場合も、批判的に描かれる。例えば、第27章でマールが失神した時に呼ばれたカール・モス医師は、以下のように描写されている。「カール・モス医師は大柄で不愛想なユダヤ人で、ヒットラーのような口ひげや飛び出た目、それに氷河のような冷静さをもっていた」(153)。

ユダヤ人の医師は、同様にユダヤ人であったフロイトを連想させるかもしれない。しかし、ユダヤ人とヒットラー風の口髭の組み合わせは、ヒットラーがユダヤ人を迫害した当の人物であるだけに皮肉である。

マーロウがモス医師に対して「マードック夫人は手荒な親が言うことを聞かない子を扱うように彼女〔マール〕を扱っているんだ」(154) と言ったとき、モスは「分かる。退行現象だ」と答えて、以下のように説明する。「感情面でのショックがあると、無意識下で子供時代に逃げ戻ろうと試みる。マードック夫人が彼女を相当に叱り、ただし程度がひどすぎなければ、その傾向は増長される。子供時代の従属関係と子供時代の保護とが一体化しているんだ」(154)。

さらに、モス医師はマールの行動を退行現象や「罪責複合 (a guilt complex：無意識のうちに潜在する罪責感)」(155) といった専門用語で説明する。しかし、彼はマールを苦しい状況から救おうとはせずに、彼女の心を精神医学的な見地から分析するにとどまる。

『高い窓』において、マールをマードック夫人による支配から救い出すのは、やはりマーロウなのである。「治療」して心の病から救い出す者としてのマーロウにおいて、2つのことが重要である。

第1に、マールを助けるためには、マーロウは真実と虚偽との間を見分けるだけの鋭さをもっていなければならない。彼は偽のコインや偽の記憶に騙されてはならないのだ。私立探偵として、虚偽の中に隠された真実を突き止め、事件の真相を明らかにすることが、マールを偽の記憶から解放し、マードック夫人の支配から救い出すことになるのである[注5]。

第2に、抑圧された弱者への思いやりの心である。マーロウはレズリーに対して何故自分がマールを助けたいかを説明する。「僕はマードック夫人を好きではないし、君のことも好きではない。この家も好きではない。君の奥さんもとくに好きというわけではなかった。けれどもマールのことは好きだ。彼女は幾分愚かで病的だが、幾分可愛らしくもある。それに僕は過去8年間にこの忌々しい家族の中で彼女が受けてきた仕打ちを知っている。それに僕は彼女が誰も窓から突き落としていないことを知っている。これで説明がついたかい？」(188)

マーロウは真実と虚偽を区別する鋭い目と、抑圧された者に対する思いやりの心をもつ私立探偵なのだ。そのようなマーロウが事件を解決するとともに、いわば治療者としての役割も演じ、心の病に苦しんできた一人の女性を救い出した点において、『高い窓』はチャンドラーの作品中で注目すべきものであると言えるだろう。

【注】

1. Conquest は「征服」の意味であるが、ここでは嫁のリンダの性格の強さを暗示していると思う。

リンダは抑圧的な姑のマードック夫人による支配や、退屈な夫との生活に我慢できず、反抗して自ら家を出ていくだけの強さをもっていた女性である。その点で、マードック夫人に精神を支配されたまま自力では脱出できなかった秘書のマールとは対照的だ。

2. こうした家族内の心理の探究という主題は、ハードボイルド探偵小説のジャンルにおけるチャンドラーの後継者と言えるロス・マクドナルドに受け継がれていく。なお、チャンドラーは、コイン探しと家族間の心理の探究の両方の主題を意識していた。それはこの作品のタイトルの選択に表れている。出版社宛のチャンドラーの手紙によると、最初の頃のタイトルは *Brasher* や *Brasher Doubloon*、あるいは *The Lost Doubloon Mystery* や *The Stolen Coin Mystery* など、盗まれたブラシャー・ダブルーンのコインの謎をめぐるミステリーを中心としたタイトルを考えていたが、最終的に現在の『高い窓』(*The High Window*) に変更している (*Raymond Chandler Speaking* 211-212)。チャンドラーは『高い窓』というタイトルを提案するにあたって、「『高い窓』というのはどうだろうか？このタイトルはシンプルで示唆に富み、最も本質的な手掛かりを指している」と述べており (*Raymond Chandler Speaking* 212)、「高い窓」からの墜落死事件をめぐっての家族内の心理探究の方により重点を置くようになったことがうかがわれる。

3. Sarah Trott は、チャンドラーの第 1 次世界大戦での従軍体験が、後に作家となって執筆した作品に与えた影響を分析している。例えば、『高い窓』においても、殺されたバニヤーの死体の描写で、語り手のマーロウがそこに「死の臭い」(the smell of death) を嗅ぎ取る場面に、戦場で大量の腐乱死体の臭いに接した作者のトラウマ的体験が反映されていると論じている (114-115)。マールもホレイス・ブライトの墜落死事件のトラウマに苦しめられており、死のトラウマは『高い窓』において重要な主題であると言えるだろう。

4. Ken Fuller は、チャンドラーの『高い窓』と、先行するダシール・ハメットの探偵小説『マルタの鷹』(1930 年) とを比較して、『高い窓』においてコイン商のモーニングスターがブラシャー・ダブルーンのコインの歴史を説明する場面には、『マルタの鷹』において登場人物の 1 人が黄金の鷹の像の歴史を説明する場面の影響が見られるとしている (81)。筆者の考えでは、『高い窓』においてはコインの偽物が、『マルタの鷹』においては鷹の像の偽物が重要な役割を演じており、どちらの作品においても、偽の宝物によって欲深な人間たちが踊らされている点に、本質的な共通点があるように思う。

5. チャンドラーは、医療技術が患者のためにではなくて私益のために用いられるような場合には、むしろ偽物を生み出してしまうことを警告している。例えば、ブラシャー・ダブルーンの事件では、コインを偽造するのは歯科技工士である。ここでは、技術 (テクノロジー) は、偽物を作り出すことによって、真実と虚偽の境をあいまいにするものとして悪用されている。

【引用文献】

Chandler, Raymond. *The High Window*. 1942. *The Chandler Collection Volume 2: The High Window, The Long Good-bye, Playback*. London: Picador, 1983. 7-196.

---. *Raymond Chandler Speaking*. Edited by Dorothy Gardiner and Kathrine Sorley Walker, U

of California P, 1997.
Fuller, Ken. *Raymond Chandler: The Man Behind the Mask*. Printed in Japan, 2020.
Trott, Sarah. *War Noir: Raymond Chandler and the Hard-Boiled Detective as Veteran in American Fiction*. Jackson: UP of Mississippi, 2016.